

地盤工学会に取り込まれて

Relationship with JGS

保高徹生 (やすたか てつお)
(国研) 産業技術総合研究所 主任研究員

1. 主な仕事と地盤工学との出会い

私は地盤工学会に入会してまだ5年程度で、大学等でも地盤工学を学んだことはありません。そんな私がなぜか、地盤工学会で事業企画戦略室(?)の幹事委員をしていたり、横浜国立大学で非常勤講師として環境地盤工学を教えていたりしています。世の中何があるかわかりません。まだ、地盤工学とは関係がない人生を歩んできたけれども、地盤工学会と出会ってしまった、というのが僕の今の感覚です。この原稿は、地盤工学会との出会いやワークライフバランスについて書くように、とのことなので、最初に地盤工学会と関係がなかった私が、なぜ会員になってしまったのか、について話したいと思います。

私は、大学・大学院では農業土木を学びました。全く地盤工学会とは関係ありません。大学・大学院を卒業後、環境コンサルティング会社に就職をしました。環境コンサルティング会社では、土壌汚染の調査・対策・コンサルティング業務に従事し、調査設計・施工・情報公開対応・シミュレーションによる地下水流動・物質移動予測などの業務に取り組んできました。地盤工学会の講習は受けることがありましたが、基本的には関係ありませんでした。

環境コンサルタント会社に入社して3年目、土壌汚染の基準設定に関して疑問を持ち、横浜国立大学の環境情報学府環境リスクマネジメント専攻(地盤工学がある理工学部とは別の学部です)の社会人博士後期課程に入社しました。昼間は通常業務をしつつ、夜間に論文執筆、時々休暇を取りゼミに出席をする、という生活を2年半送り、無事、博士(環境学)を取得しました。しかしながら地盤工学会で発表をする機会もなく、地盤工学会を意識したことはありませんでした。

博士を取得して通常の会社員に戻っていた2009年の後半くらいでしょうか。地盤環境分野のK先生から声をかけて頂き、地盤工学会が作成する「大地をめぐる環境問題」というWEBラーニングの教材作成の委員会に委員として加わることになりました。多分、この時が地盤工学会との初めての出会いであり、学会に行った初めての機会でもありました。

この委員会は密度が濃く、半年の間に7~8回委員会が開催され、WEBの教材を作成し、全員で文字通り一言一句チェックをしていくという作業を行いました。そこに

参加されていた地盤工学会の地盤環境系の委員の皆様(先輩・大先輩ばかり)の見識とハードワークにこんな人達になれたらいいなあ、そして飲み会好きな感じに、とても居心地が良いなあ、と感じていたのを覚えています。この委員会の終了時点で、委員長から「保高さん、地盤工学会に入っていないの?それはあかんなあ。直ぐに入るように。」と言われて慌てて入ったことを昨日のように思い出します。

その後、2011年3月11日に東日本大震災が起これ、2011年4月から産業技術総合研究所(以下、産総研)に所属が変わりました。この震災と転職が私と地盤工学会の結びつきを強めるきっかけとなりました。学会提言の検証と評価に関する委員会に参加させて頂く機会を得たのち、地盤工学会 東日本大震災対応調査研究委員会 地盤環境研究委員会に幹事委員として参画させて頂き、いくつかのプロジェクトを皆様とご一緒させて頂きました。

この委員会に参加する過程で、学会発表についても、徐々に地盤工学会をメインフィールドとするようになってきました。そんなある日、学会で知り合ったSさんから電話がかかってきて、「事業企画戦略室の委員を交代してもらえないですか?」と打診があり、事業企画戦略室の室員に、さらには学会で知り合ったT先生からの依頼で、横浜国立大学の非常勤講師として環境地盤工学を教える、という機会も頂いております。さらに現在、産総研内の国際標準化プロジェクトとして、地盤工学会が国内審議団体であるISO/TC190(Soil Quality)のISO/TS21268-3「上向流カラム通水試験」のアップグレードリーダーをさせて頂くなど、ますます地盤工学会との関わりが増している(というか、逃げられなくなっている???)日々です。

このように地盤工学会に取り込まれていったわけですが、決して嫌なわけではありません。私は環境地盤工学の分野の方々、事業企画戦略室の皆様、地盤工学会事務の皆様など、限られた方々としかお会いしていないのですが、気持ちが良い方が多く、時に仕事が多くて辛いこともあります。楽しく学会活動をさせて頂いております。

2. 1日のタイムスケジュール

1日のタイムスケジュールを書くためには、家族構成

を書かねばなりません。コンサルティング会社で働く妻、6歳息子、2歳の娘、という家族構成です。共働きのため、朝ご飯と朝の保育園の送りは私の仕事、お迎え、夜ご飯は妻の仕事、という形の分担をしております。以下に平日の一日のスケジュール例を記載します。

4:00 起床：自分の仕事
7:00 朝食づくり・保育園の支度・朝食
8:00 保育園への送り
9:30 打合せ、現場、出張など
20:00 帰宅
21:00 子どもとお風呂
22:00 就寝

1週間のうち3～4日は日帰り出張のため、まとまって論文等を書く時間を日中は取りにくいので、早朝に自分の仕事をするように心がけています。子どもの寝る時間にそのまま寝てしまうことも多いので、睡眠時間としては十分確保できているのですが、冬は寒いので起床が非常に辛いです。

また、妻・私とも海外出張があるので、その時には日本に残ったほうは、保育園の送り、お迎え、ご飯、掃除、洗濯、お風呂、そして仕事をしなければなりません。この時ほど、妻がスーパーマンだと思ったことはありません。妻が海外出張で不在時は、日々の生活を維持することで精一杯になります。仕事のことも余り考えられなくなるので、妻不在時にピークが来ないように調整をします。

休日には自転車に子どもを二人乗せて、上野動物園や小石川植物園などに遊びに行きます。写真-1はウルトラマンのスタンプを押すために、自転車でJRの駅を回っているところです。

写真を、ということなので、バルセロナで発表をしている写真を載せます(写真-2)。これも地盤工学会とは関係ない学会ですが。

3. ワークライフバランス

ワークライフバランスという言葉は、仕事と生活の調和という意味でしょうか。その調和は、一人ひとり、家族ごとに違うと思います。最近は何をとって色々忘れることができるようになったせいか、仕事と家庭の切り替えがうまく出来るようになってきました。仕事の悩みは、生活に戻ると忘れ、生活の悩みは仕事に戻ると忘れ、を繰り返している気がします。逆に考えると、仕事のことを忘れるほど生活を楽しみ、生活の悩みを忘れるほど仕事を楽しんでいる、ということかもしれません。

人・家族の数だけワークライフバランスの形はあるでしょうし、家族の年代が変遷すると変わると思います。ということで、楽しめるやり方でバランスを取って行きたいと思っています。

いずれにせよ、産総研は組織も制度も、仕事と生活の



写真-1 休日に子どもたちと行ったスタンプラリー

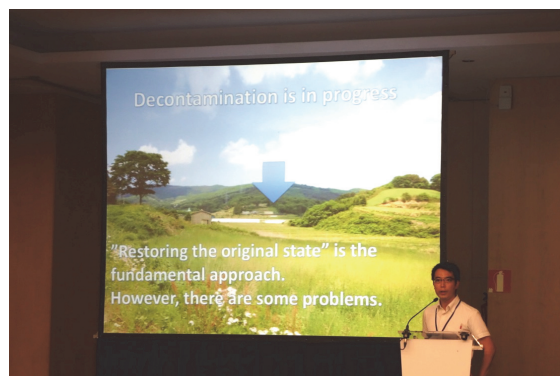


写真-2 海外での学会発表の様子

バランスが取りやすい機関だな、と思っています。

4. ダイバーシティについて

ダイバーシティ、というのは多様性のことですね。若手、シニア、男性、女性、色々視点はあると思います。個人的には上記の区分も大切なのですが、研究委員会等で様々な背景、職業の方が集まり、一つのことについて議論をすることでダイバーシティは生まれていると思います。何かを生み出すための研究委員会・学会は重要だと思っています。一方、自分と同質な方だけでなく、異質な方と出会い、意見を交換することで、「あ、そういう見方もできるんだ〜」という視点が持てることも研究委員会・学会の良い所だと思っています。

同じ組織の中のダイバーシティも重要ですが、異なる組織間・異なる業界間のダイバーシティも重要です。学会はこれらが交わる「場所」なので、貴重な「場所」なのだろうな、とこの文章を書きながら思っております。

5. 終わりに

若手にとっても、シニアにとっても、男性にとっても、女性にとっても、学会が緊張感と居心地の良さの両方を保てるのが、魅力ある学会につながると思っています。そのような学会に出来るよう、少しずつ努力をしていきたいと思っています。

(原稿受理 2015. 4. 22)

HP19